

明治大正期肥料商の北海道直買活動と人造肥料取引

——大阪府貝塚廣海惣太郎家の事例をもとに——

山田雄久

はじめに

幕末から明治期にかけて日本の農業発展を導いた鱒・鯡魚肥は大阪・東京等の主要都市市場を経由して各地農村部へ運ばれた。徳川期の近江・畿内農村では大坂に流入した関東産干鰯を積極的に利用し、幕末期以降北海道漁業に進出した近江商人がもたらす北海産魚肥を用いて農業生産を拡大した。北海産魚肥を導入することによって畿内を中心とした農村地域の農業生産力は飛躍的に向上したのである。⁽¹⁾米穀と並ぶ代表的商品として大坂・江戸の荷受問屋が肥料を大量に荷捌きし、先物取引等の投機的売買対象として数多くの仲買商・地方商人はそれらを売買した。幕末

期以降市場経済の発達によって日本の農業生産が発展したという視点から、幕末〜明治期の大阪・東京における肥料市場を検討することは近代移行期における日本の経済発展を明らかにするうえで不可欠の作業であるといえよう。⁽²⁾

明治後期における肥料市場の変質に着目する本稿では、大阪府貝塚の肥料商である廣海惣太郎家の事例から北海道魚肥の直買活動と人造肥料取引の拡大について検討する。徳川後期から明治前期にかけて北前船商人が北海産魚肥の販売を大阪の北海産荷受問屋へ委託し、函館・小樽等の北海道商人と旧場所請負人が東京の荷受問屋に販売を委託した。明治後期以降産地商人の活動が活発となり、次第に北前船商人が函館や小樽に拠点を置くようになると、大阪・

東京・名古屋肥料商は北海道商人から直接魚肥を購入するとともにそれらの買付を委託した。一方明治後期には魚肥の代用肥料として普及した安価な輸入大豆粕が北海道産魚肥と並ぶ重要肥料として各地に普及したため、大正期以降大阪肥料商は魚肥以外に大豆粕や人造肥料を積極的に取り扱うことによつて新たな活路を見出した。畿内農村部では北海道産魚肥に代わる肥料として人造肥料や大豆粕の有効性を認識し、魚肥とそれらを組み合わせることで農業生産の拡大に成功したのである。⁽³⁾

一、明治後期における北海道直買活動

(一) 廣海家による北海道産魚肥の買付開始

幕末期以降北前船商人や大坂・兵庫肥料商から大量の北海道産魚肥を購入した貝塚肥料商の廣海家は、北前船商人の活動が停滞する明治中期に北海道産魚肥を購入した大坂・兵庫肥料商から魚肥を仕入れ、北海道へ出張員を派遣して直接魚肥を買い付けるようになった。廣海家による北海道での買付活動を示した表1によれば、廣海家は明治二七(一八九四)年に北海道での直買活動を展開したが、しばらく北海道での直買については慎重な態度を示した。⁽⁴⁾ 北海道で

の魚肥購入については産地の買付を担った北前船商人を通じて行うにとどめ、大阪・兵庫肥料商から魚肥を大量に買入れたのである。

その後廣海家は木谷七平・川口平三郎・秦新五郎・井上茂助等の大阪・兵庫肥料商から朝鮮産干鰯や北海道産魚肥を購入するとともに、小樽に拠点を持ち大阪に本部を置いた北前船商人廣海二三郎や大家七平から北海道産魚肥を仕入れた。⁽⁵⁾ 北海道産魚肥が集まる大阪で確実に鮮魚肥を確保しながら、北海道に拠点を持つ北前船商人から需要が拡大している種類の魚肥を購入したのである。その後廣海家や大家家、熊田源太郎等産地に拠点を置き現地での魚肥買付を行う北前船商人から魚肥を購入した廣海家は値上がりが見込まれる北海道産魚肥を獲得すべく明治三六年から北海道直買を再開し、⁽⁶⁾ 函館商人岡本忠藏・橋本正三郎・川名得太郎や、小樽商人矢崎常三郎等を通じて北海道産魚肥を購入した。廣海家の買付帳簿である「万買帳」には北海道商人の名前が出てくる場合と北海道直買として記録される場合があり、北海道直買とある場合は北海道商人が保有する魚肥を同家が購入したことを、名前が出る場合は北海道商人を通じて産地で買い付けたことを意味した(後述)。北海道商人に

表1 明治後期における廣海家の魚肥買付活動

買入先	購入銘柄	代 金
(明治27年)		
伊藤祐太郎(北海道直買分)	利尻粕1037本・宗谷粕706本	8757.97 円
田口梅太郎(北海道直買分)	祝津粕570本	3087.213円
(明治29年)		
北海道直買座	利尻粕859本・鬼鹿粕436本・宗谷粕49本	8251.678円
南部直買座	南部粕1131本	4610.204円
(明治36年)		
北海道直買座(橋本買・岡本買)	鯡粕1056本・樽舞粕308本	11991.23 円
矢崎常三郎	礼文粕1622本	13727.767円
岡本 忠 蔵	鯡粕369本	3123.55 円
(明治37年)		
矢崎常三郎	宗谷粕245本・天売粕1450本・鯡粕2303本・浜益粕1468本	49059.519円
岡本 忠 蔵	地廻粕183本	1660.176円
橋本正三郎	新樽舞粕151本	1355.771円
(明治38年)		
矢崎常三郎	浜益粕803本・鯡粕3584本・利尻粕696本	56741.157円
川名得太郎	鯡粕100本・紋別粕200本	3435.997円
橋本正三郎	樽舞粕477本・鯡粕275本・地廻白粕21本・鰯粕100本	12462.069円
岡本 忠 蔵	樽舞粕200本	2487.19 円
(明治39年)		
矢崎常三郎	鬼脇粕160本・増毛粕2407本・礼文粕594本・苫前粕1152本	1734.344円
岡本 忠 蔵	樽舞粕50本	631.479円
佐野喜一郎	礼文粕402本	4556.327円
森本 一 郎	鰯粕401本	4897.885円
北海道直買座(満留八買分)	宗谷粕1326本	13586.065円
北海道直買座(川名買分)	樺太粕200本	2371.772円
北海道直買座(渡辺買分)	樺太粕434本	4977.675円
北海道直買座(橋本買分)	樺太粕544本・樽舞粕726本・雑粕23本・鰯粕50本・鯡粕50本	15987.839円
北海道直買座(岡本買分)	樽舞粕270本	2982.174円
(明治41年)		
矢崎常三郎	樺太粕2953本	33979.446円
森本 一 郎	地廻粕24本・礼文粕160本	1966.712円
小松千代蔵	不撰14本	191.523円
佐野喜一郎・廣海商店共有分	浜益粕874本	9211.214円
佐野喜一郎	浜益粕984本・利尻粕1465本	26558.962円
北海道直買座(田中伊太郎買)	天売粕591本	6946.023円
北海道直買座(渡辺三蔵買)	増毛粕678本・鬼脇粕537本	12320.379円
北海道直買座(小松千代蔵買)	宗谷粕3700本	27150.493円

買入先	購入銘柄	代 金
(明治42年)		
佐野・廣海共同買分	鬼鹿粕300本	2476.8 円
佐野喜一郎	浜益粕329本・利尻粕887本・余市粕700本	16340.931円
矢崎常三郎	焼尻粕1431本	13277.053円
満留八商店	厚田粕405本	3817.36 円
森本一郎	樺太粕400本・鯡粕48本	4078.41 円
岡本忠蔵	樺太粕500本・鯡粕27本	5548.43 円
北海道直買座(渡辺三蔵買)	増毛粕167本・雑魚粕185本・樺太粕2007本 ・鯡粕385本	28481.096円
北海道直買座(小松千代蔵買)	紋別粕541本・宗谷粕1521本	17029.716円
北海道直買座(森本一郎買)	樺太粕461本	5282.76 円
北海道直買座(熊田・廣海共同分)	鯡粕2453本	24037.434円

(出所) 明治27・29・36～39・41・42年「万買帳」(貝塚市郷土資料室保管「廣海家文書」所収)。

(注) 明治40年「万買帳」が残存しないため同年の取引内容は不明。

よる産地買付活動が活発となった結果、出張員を派遣した廣海家は北海道商人を通じて魚肥を買い付けたのである。

(2)北海道商人を通じた廣海家の魚肥購入

北海道での買付によって十分利益を上げることが可能であると判断した廣海家は、明治三七・三八年に函館商人岡本・橋本・川名家と小樽商人矢崎家を通じて大量に魚肥を購入し、地廻粕や鰯粕等高値で売れると見込んだ銘柄を買い付けた。兩年の帳簿には北海道直買の記載がなく、同家は北海道商人に買付を委託することで魚肥の取引量を拡大したと考えられる。明治三九年には北海産魚肥を安定的に確保するため、函館商人川名・橋本・岡本家や小樽商人満留八商会・渡辺三蔵から大量に魚肥を買付け、現地に出張員国定吉祐・佐々木與七を派遣することによって北海道魚肥の生産動向を把握した。北海道北部地域で捕獲・加工した鯡魚肥を大量に取り扱う小樽商人が成長したのを受けて、廣海家は産地と親密な関係を築いた北海道商人から北海産魚肥を安価に仕入れることに成功したのである。

産地で魚肥を買い付けるにあたって、廣海家は北海道商人を通じて現地の漁業家と直接取引契約を交わした。(史

料一」として掲げた明治四一年の取引契約書によれば、廣海家は出張員佐々木與七を派遣して稚内町マタルナイの漁業家から鯡魚肥を直接買い付け、同じ日時に他の稚内の漁業家とも同様の取引契約を結んだ。⁽⁷⁾

〔史料一〕

〆粕売渡証

宗谷郡稚内町字マタルナイ産

一〆粕精品凡六拾五石

直段百石ニ付金千五百五拾円也

内 金五拾円也 外二五円也

本日約定内金請取

右ノ通り正ニ売渡申候処実正也、請渡ノ儀ハ本月廿六日限り残金清算積入同時ニ原品御渡可申、為念売渡証如件

明治四十一年六月廿二日

稚内町字マタルナイ 売渡人 上出金太郎

保証人 長内音四郎

廣海商店代佐々木與七殿

廣海家の出張員佐々木は明治四一年六月廿二日に稚内町の漁業家上出金太郎との間で鯡〆粕六五石約千円分の購入契

約を交わし、内金として五五円を渡してから四日後に代金を清算した。十分な取引情報が得られない現地では他の漁業家を保証人にして確実に魚肥を獲得しようとしたのである。産地での買付を実施した函館・小樽商人に漁業家を紹介してもらいつつさまざまな情報の提供や取引の便宜を受け、小樽商人佐野喜一郎と共同で浜益粕を多数買い入れた。廣海家は北海道商人との取引を魚肥仕入方法の中心に据え、自ら北海道に出張員を派遣することによって産地の商況をいち早く把握した。

小樽商人佐野家と廣海家との魚肥買付勘定を示した表2によれば、魚肥仕入先である稚内の漁業家へ送金した佐野家は魚肥を購入したか、あるいは魚肥の買付を委託したと思われる小樽商人渡辺家・小松千代蔵に対して支払いを行った。廣海家へ北海道産魚肥を積送した佐野家は廣海家からの為替金や、船荷として魚肥を輸送した船の荷為替金を獲得することによって仕入代金を支払ったのであり、船の荷為替金は北海道に拠点を置く北海道拓殖銀行や北海道銀行、十二銀行小樽支店等から借り入れた。このような日本海海運の発達によって、北海道商人は買い付けた魚肥を直接各地の販売先へ送ることができた。

表2 廣海家の魚肥買付勘定(明治41年)

(単位・円)

月日	摘要	借方	貸方
6月27日	廿九日稚内へ電送	6500	
	右七月七日迄十一日間日歩	21.45	
6月29日	右電送料	16.25	
	稚内へ電送	1000	
	右電送料	3.1	
	右三口七月七日迄九日間日歩	2.74	
6月30日	北陸丸ノ粕荷為替金入		4500
	右為替打歩	16.2	
	右海上保険料	43.21	
	右三口七月七日迄八日間戻日歩		10.66
7月1日	御本店ヨリ電為替金入		2000
	渡辺三蔵渡ス	800	
	右二口七月七日迄七日間戻日歩		2.52
7月3日	北陸丸粕船内仲仕賃	16.78	
	右七月七日迄五日間日歩	0.03	
7月6日	稚内へ電送	2000	
	右送金料	5.6	
	右二口七月七日迄二日間日歩	1.2	
7月7日	千代丸粕荷為替金		9000
	右荷為替金打歩	40.16	
	右海上保険料	85.41	
	右船内仲仕賃	34.165	
	右四口七月十九日迄十三日間日歩		6.42
7月10日	稚内へ電送	3600	
	右送金料	8.6	
	右二口七月十九日迄十日間日歩	3.61	
7月13日	志賀浦丸粕荷為替金		11000
	右為替打歩	38.5	
	右船内仲仕賃	47.5	
	右海上保険料	125.97	
	右四口七月十九日迄七日間日歩		7.55
7月14日	秋田へ送金	9000	
	右七月十九日迄六日間日歩	5.4	
7月18日	渡辺三蔵へ渡ス	225	
	右七月十九日迄二日間日歩	0.05	
7月20日	本日迄ノ立替電信料十四通代	4.07	
	海上保険料四割戻し		101.84
	御本店へ送金	2400	
	小松千代蔵渡ス	100	
	合計金	26144.995	26628.99

(出所) 「明治四拾叁年七月式拾日付佐野商店より国定吉祐宛精算書」(前掲『廣海家文書』所収)。

表3 廣海家の北海道直買(明治39~43年)
(単位・俵)

取引先	39年	40年	41年	42年	43年
(買入部)					
満留八	1326				
渡辺	434	951	1215	2677	1621
川名	200	172			1836
橋本	1353				
岡本	270	208			779
井上	870				
森本	367	1176	160	461	1257
佐野		701			168
田中		1520			
小松		468	2633		
熊田共同				4405	
矢崎					131
(委託部)					
矢崎	1746	2953			
佐野	402				
満留八	691				
岩崎	1517				
遠藤	709				

(出所) 明治39~43年「商品参照録」(前掲「廣海家文書」所取)。

(注) 買入部は現地での直接購入分、委託部は現地での買付委託分を示す。

明治四一年に廣海家は佐野家と共同で魚肥を仕入れ、翌年には小樽に拠点を置いた北前船商人熊田家とともに直接産地へ赴き、魚肥の買付を実施した。加賀の北前船商人熊田家は明治二〇年代以来廣海家の主要な取引先で、明治後期に産地の漁業家と直接取引することによって北海産魚肥の仕入活動に力を注ぐようになり、魚肥直買活動を本格的に開始した廣海家の重要な取引先として産地の商況を伝達したのである。さらに廣海家は出張員として後藤久七を北海道へ派遣し、小樽の熊田出張店と絶えず交渉を重ねながら北海道直買活動を展開した。

(3) 廣海家の北海道商人に対する買付委託

函館商人森本家や小樽商人渡辺家からの買付とともに小樽商人佐野家や小樽熊田出張店との共同仕入によって廣海家は北海道で本格的に魚肥買付活動を行った。「商品参照録」の記述から北海道における廣海家の魚肥買付先を示した表3では、買入部が表1の北海道直買座、委託部が北海道商人からの買入の数値と一致する。買入部でみられる北海道商人からの魚肥買入量は増減を繰り返しながら拡大したが、必ずしも同家は同じ商人から継続的に直買を行わず、年々の商況に応じてさまざまな商人から魚肥を仕入れた。また明治三九・四〇年にみられる委託部が表1で北海道商人の名前に記載された項目と一致することから、それらは彼らへ魚肥の買付を委託した内容を示すものと考えられる。

〔史料二〕の仕切書では、廣海家の小樽商人渡辺家に対する買付手数料や魚肥仕入先である北海道仲買商への支払を勘定している。

〔史料二〕

仕切書

一 青大三印鯨ノ粕 壹千貳百八拾參俵

皆掛参万三千九百四拾壹貫七百匁

内 壹千六百九拾七貫〇八拾五匁 風袋

壹百貳拾八貫参百匁 入目

正ミ 参万貳千百拾六貫参百拾五匁

此石 八百〇貳石九斗〇七合

直段金壹千七百貳拾匁也

代金壹万参千八百拾匁也

外二 金八拾匁貳拾九錢也 手数料

金六拾九匁〇五錢也 仲買へ渡

金五拾七匁七拾参錢也 舁賃

小計金貳百〇七匁〇七錢也

合計金壹万四千〇拾七匁〇七錢也

右之通り相違無御座候也

明治四十四年八月八日 渡辺三蔵商店

廣海惣太郎殿 代後藤久七殿

産地で北海産魚肥を買い付けた函館・小樽商人へ廣海家は各種銘柄の買付を臨機応変に依頼したのであり、北海道商人の産地買付活動に大きく依存しながら北海道での魚肥仕入活動を推進したといえよう。表3の「商品参照録」には明治四一年以降委託部についての記述がみられないが、実

際には〔史料二〕にあるように委託手数料を支払う形で北海道商人から魚肥を仕入れ続けた。

北海道直買活動を展開した廣海家は明治末年以降、函館商人森本家・岡本家と並ぶ主要な仕入先として小樽商人菅田平二と函館商人山路富次郎から北海産魚肥を買い付けた。大正期には彼らが兵庫・大阪肥料商から森本家や山路家等の北海道商人と共同で買い入れた北海産魚肥を購入したため次第に廣海家は北海道直買活動を縮小し、大正五(一九一六)年に北海道直買座を停止して北海道商人と大阪・兵庫肥料商から北海産魚肥を仕入れるようになった。国内における魚肥の生産量が減少し人造肥料や大豆粕の供給量が増大した明治末期に同家は多木製過燐酸肥料の大量仕入に踏み切り、大正期には硫安・大豆粕等の各種肥料を取り扱うようになった。

二 明治大正期における人造肥料取引

(一)廣海家による多木製人造肥料の購入

明治二〇年代以降本格的に全国へ人造肥料を販売した多木製肥所は大豆粕の輸入が途絶した明治四〇(一九〇七)年頃人造肥料の需要が拡大するなかで急速に販路を拡大

した。⁽⁹⁾北海道直買活動を展開した廣海家は肥料取引の拡大をめざして明治四三年に播州別府の多木製肥所から過磷酸肥料を購入し、以後多木家を代表的取引先と位置付けて人造肥料を積極的に泉州農村へ販売した。畿内農村部へ北海道産魚肥を大量に売り込みながら過磷酸肥料の使用法を直接農家に教え、それらを売り込んだのである。多木製肥所との取引勘定を示す表4では廣海家が多木製人造肥料の広告代や岸和田新聞の広告料を支払っており、広告活動を通じて人造肥料の有効性を力説し、それらの利用法を説明することによって販路を開拓したことがわかる。泉州における北海道産魚肥の代表的販売店であった廣海家が多木製人造肥料を取り扱ったため、農家は安心して過磷酸肥料を導入できたものと思われる。

自社の過磷酸・窒素肥料を商標登録した多木製肥所はより効果の高い新商品を開発した。表4によれば明治四三年に多木製人造肥料としてイ印(過磷酸肥料)・チ印(窒素磷酸甲号)・ヨ印(多木麦肥料)といった売れ筋商品とともに、効果が抜群で好評を得たホ印(調和磷酸)、新製品のセ印(強磷酸肥料)を廣海家は大量に仕入れた。⁽¹⁰⁾農作物の作付時期にあたる一〇五月と九〇一二月に五〇呎・一〇〇呎・

一五〇呎・二〇〇呎等のまとまった単位で購入しながら同家は各種人造肥料を取り揃えた。翌年にはル印(九重肥料)・タ印(多木稲肥料)等の過磷酸肥料を購入して人造肥料取扱店の活動を本格的に開始したのである。大正期には新開発の「しき島肥料」や「新畑作肥料」を農村部に販売し、人造肥料の需要を一層拡大した。魚肥を利用し続けた畿内農村でも魚肥に代わる有効な肥料として人造肥料を頻りに利用したのであり、第一次大戦期に同家は多木製人造肥料に加えて過磷酸・硫酸・大豆粕の取引を開始した。

(2)廣海家による大豆粕・硫酸取引の開始

北海道産魚肥と多木製人造肥料を取り扱った廣海家は農村部に浸透しつつあった大豆粕と各種人造肥料の取引に乗り出し、大正八(一九一九)年大量に過磷酸や硫酸、大豆粕を仕入れた。同年における人造肥料・大豆粕取引を示した表5によれば、多木製人造肥料であるイ・チ印や「新畑作肥料」のほか、大阪肥料商川口家から豊年撒大豆粕や大日本人造肥料・大阪化学肥料製過磷酸、兵庫肥料商井上家からイギリス製硫酸や日本窒素製硫酸を買い入れた。硫酸を大量に購入することによって廣海家は肥料販賣方針を大き

表4 明治後期廣海家の多木肥料取引勘定

取引年月日	取引内容	取引額
(明治43年) 7月8日	㊦印50呎	120 円
10月2日	㊦印100呎	230 円
10月29日	㊦印150呎	330 円
10月22日	広告代配布人足賃	6.4円
10月31日	岸和田新聞広告料	7 円
11月18日	㊦印150呎・㊧印50呎・㊨印100呎	668.5円
12月4日	広告貼付人足賃	0.8円
11月29日	㊩印300呎・㊦印300呎・㊨印100呎	1122 円
12月15日	㊩印300呎・㊫印250呎	512 円
(明治44年) 1月14日	㊬印100呎	255 円
2月7日	㊦印50呎・㊨印50呎	215 円
2月11日	㊦印200呎・㊨印50呎・㊭印70呎・㊬印50呎・㊮印50呎・ ㊯印50呎	1128.5円
2月18日	㊦印50呎・㊨印50呎・㊬印50呎	362 円
2月26日	㊦印50呎・㊨印50呎	221.5円
3月1日	㊨印200呎・㊦印100呎・㊭印50呎	840.5円
3月12日	㊬印50呎	135 円
4月13日	㊨印100呎・新調和100呎	503 円
5月24日	新調和100呎	208 円
5月25日	新調和1300呎・㊨印233呎	857 円
9月13日	㊬印100呎・㊨印100呎	485 円
9月21日	㊩印300呎・㊦印200呎	699 円
10月6日	㊬印100呎・新調和100呎・㊮印20呎	506 円
10月15日	㊦印100呎・㊨印100呎	1120 円
11月3日	㊦印500呎	1125 円
11月19日	㊨印200呎	440 円
12月8日	㊦印400呎・㊨印200呎	1340 円

(出所) 明治42・43年「万買帳」(前掲『廣海家文書』所収)。

表5 大正期廣海家の人造肥料・大豆粕取引勘定

取引先	取引月日	取引内容	取引額	
(大正8年) 多木製肥所	2月13日	㊦印500呎・㊧印250呎	2770 円	
	3月8日	㊦印500呎	1187.5 円	
	3月27日	㊧印100呎・㊦印200呎・新畑作肥料壺300呎	2590 円	
	5月17日	㊦印100呎	485 円	
	9月1日	㊦印150呎・㊧印550呎	1857.5 円	
	9月13日	㊦印650呎・㊧印50呎	3582.5 円	
	10月18日	㊧印700呎	1445 円	
	11月9日	㊦印300呎・新畑作肥料壺400呎	3605 円	
	12月3日	㊦印400呎・㊧印325呎	3058.75円	
	川口平三郎	2月28日	豊年撒大豆粕1000呎	4150 円
	川口・岡田	8月21日	大日本人造肥料(株)過磷酸750呎	1709.7 円
		8月24日	大日本人造肥料(株)過磷酸750呎	1709.7 円
12月12日		大阪化学肥料(株)新過磷酸280呎	621.32円	
久保・井上	9月22日	輸入イギリス製硫安288袋	8424.51円	
	9月30日	日本窒素硫安50噸	16300 円	
(大正9年) 多木製肥所	1月5日	㊦印500呎	2775 円	
	2月6日	㊦印700呎	4560 円	
	3月26日	㊦印550呎	4537.5 円	
	12月2日	㊦印700呎	2520 円	
	ラサ島燐礦 帝国人造肥料	7月21日	拾六過磷酸800呎	1456 円
		10月24日	壺号過磷酸800呎	2237.5 円
		11月7日	壺号過磷酸200呎	340 円
		11月25日	壺号過磷酸500呎	850 円
	秦正二 秦・小浦	9月7日	アメリカ産鯨粕粉末631袋	4220.75円
		9月19日	豊年撒大豆粕1000呎	4100 円
		10月25日	豊年撒大豆粕765呎	2929.95円
	小浦梅太郎 八丈・田中	10月	豊年撒大豆粕735呎	2815.05円
		10月18日	㊦印硫安208呎	1878.24円
		10月15日	㊦印硫安250呎	2100 円
		10月18日	㊦印硫安100呎	910 円
		10月27日	㊦印硫安9呎	62.4 円
	田中茂義	11月26日	イギリス産雑魚粕粉末300袋	3176.82円
	日本化学肥料	11月25日	撒大豆油粕500呎	1770 円

(出所) 大正7年「万買帳」(前掲『廣海家文書』所収)。

く転換した。農家が過磷酸肥料よりも新商品である硫酸の品質を高く評価するようになると、廣海家は硫酸の大量販売を決意した。魚肥を利用し続けた畿内農村では明治中期以降輸入肥料である大豆粕を魚肥料以上に多用しなかったが、魚肥の供給量が減少した大正期に硫酸や過磷酸等と組み合わせて大豆粕を利用するようになり、廣海家も魚肥の代用肥料として大豆粕の取引量を拡大した。

過磷酸や硫酸、大豆粕の取引を軌道に乗せるにあたって廣海家は大阪・兵庫肥料商からそれらを安定的に購入した。北海産魚肥の供給量が減少するなかで、大阪・兵庫肥料商が輸入肥料である朝鮮産魚肥や中国産大豆粕、さらには過磷酸肥料や硫酸を大量に取引したためである。大阪・兵庫肥料商から北海産魚肥を仕入れた廣海家も大正期以降彼らから人造肥料や大豆粕を購入することで肥料取引を継続した。明治中期以降大阪・兵庫の肥料市場が発達することで各地の肥料商は安定的に多種類の肥料を購入できた。地方肥料商の産地直買活動とともに、産地商人や肥料製造会社と結び付いた集散地市場の売買機能が向上することによって国内の肥料取引は一層活発になったのである。

〔付記〕史料閲覧に際して大変お世話になりました廣海啓太郎氏、貴重なご教示を賜った廣海家史料調査会・廣海家文書研究会・貝塚市郷土資料室の方々にご心より感謝申し上げます。なお本稿は、平成七年度科学研究補助金総合研究(A)・平成八年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)による研究成果の一部である。

(1) 鶴岡実枝子「近世近江地方の魚肥流入事情」(『史料館研究紀要』第三号、一九七〇年)、水原正亨「近世近江八幡の干鰯屋仲間」(『滋賀大学経済学部付属史料館研究紀要』第一号、一九七八年)ほか。

(2) その試みの一つとして中西聡「近世・近代の市場構造―松前鯡肥料取引の研究―」(東京大学出版会、一九九八年)があげられる。明治期大阪肥料商の経営展開については、拙稿「近代日本の肥料市場と廣海家の魚肥仕入活動」(石井寛治編『商人の活動からみた全国市場と域内市場―天保期から第二次大戦期―』(平成七年度科学研究費補助金総合研究(A)・平成八年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書)、一九九七年)を参照。

(3) 主要都市市場における大豆粕・硫酸等の輸入肥料については、坂口誠「明治後期―第一次大戦期における川越地方の肥料市場―伊藤長三郎家の帳簿から―」(『社会経済史学会第六八回全国大会報告要旨』京都大学、一九九九年)、四四頁を参照。

- (4) 明治二七・二九年「万買帳」(貝塚市郷土資料室保管『廣海家文書』所収、以下の廣海家関係の史料については、同文書を参照)。
- (5) 明治三一・三三年「万買帳」。
- (6) 明治三六年「万買帳」。
- (7) 明治四一年「上出金太郎より佐々木與七宛、粕売渡証」ほか。
- (8) 明治四四年「渡辺三藏商店より廣海惣太郎・後藤久七宛仕切書」。
- (9) 多木化学百年史編纂委員会『多木化学百年史』多木化学株式会社、一九八五年、二五頁。
- (10) 明治四四〜大正四年「多木肥料買価表」(前掲『廣海家文書』所収)、前掲『多木化学百年史』、三四頁。
- (やまだ たけひさ・奈良産業大学経済学部助教授)